説教余滴、「1517 年・ヴィッテンベルク」、2017 年 9 月 24 日
　　8 月 6 日、9 月 17 日に続く第 3 回

印刷技術は羅針盤、火薬とともに「ルネサンス三大発明」の一つにあげられています。

グーテンベルクは、
1439 年頃にヨーロッパで初めて活字による印刷を行いました。活字量産方法の発明、油性インクの採用、当時使われていた農耕用スクリュープレスのような木製印刷機の採用など、様々な面で印刷に貢献しました。真の画期的発明といえるのは、それらを組み合わせて実用的システムとしたことであり、それによって本の大量生産を可能にし、印刷業者にとっても読者にとっても経済的に成り立つようにしたことです。グーテンベルクの活字生産方法の目新しい点は、古くから活字合金の発明とパンチ法と呼ばれる鋳造技法といわれています。

1517 年に起こったルターの宗教改革も、その効果が明確に現れた一例です。ルターの文書はただちに印刷され、その意見が素早く、広く伝えられました。この印刷技術なくしてはルターの宗教革命は成功しなかったでしょう。

グーテンベルクに関する古い記録は、裁判記録以外ほとんどなく、活版印刷技術の真の発明者は誰かという論争が古くから行われてきました。それでも、グーテンベルクとする説が最も有力です。1445 年までに活版印刷技術を考案し、その機器の実用化に成功して、自ら印刷業・印刷物出版業を創設したようです。金属活字を使った印刷術を発明したことで印刷革命（英語版）が始まり、それが一般に中世で最も重要な出来事の 1 つとされています。書かれ、読まれるためにそれぞれの国語が整備されました。国家、地域ごとに用語が統一され、思想・信条も討論されやすくなり、変化しました。また、各人が自分の言葉で聖書を読み、祈り、讃美を捧げる、という改革の精神も伝えられました。近代人が生まれます。
こうして、活版印刷はルネサンス、宗教改革、啓蒙時代、科学革命の発展に寄与しました。